

上淀麿寺塑造丈六三尊仏像の復元 断片レプリカを用いた復元模型の制作 -博物館の資料展示における新たな事例の紹介-

○横川耕介（愛知仏像修復工房） 森本康永（株式会社 地域みらい）
岩田文章（米子市教育委員会）

1、はじめに

鳥取県米子市の上淀麿寺は、7世紀末～8世紀初の創建と考えられ、10世紀ごろに火災によって焼損して倒壊したため、廃絶したとされている。平成2年に発掘調査が始まり、金堂と2基の塔の基壇とともに多数の壁画、塑像片が出土し注目された。平成24年、上淀白鳳の丘展示館内に上淀麿寺の最盛期である奈良時代後半期の金堂内部が原寸大で復元され、壁画、塑像の復元模型も展示された。本研究は、出土断片から推定復元された三尊仏の制作報告である。

2、復元までの経緯

平成2年より行われた発掘調査で焼土4300点が出土し、この中に法隆寺金堂壁画と並ぶ日本最古級の壁画や大小の塑造仏像の断片等が混じっていた。塑像に関すると思われる遺品は700点に及ぶが、すべて火災により素焼状態となっており造形的な要素を持つものは100点程であった。それらを整理分類したところ、丈六級の如来像と一丈級の菩薩像、他に天部像等の存在が確認された。形状が明らかで主要な各塑像断片の部位の特定を進め、復元図を作成し検討を重ねた後、＜上淀白鳳の丘展示館＞内に金堂の内部を原寸大で復元する運びとなり、米子市からの委託事業として壁画とともに丈六級三尊像の復元制作をした。

3、復元制作について

復元制作作業は、平成22年度から24年度にわたり、愛知県立芸術大学山崎隆之名誉教授、東京芸術大学松田誠一郎教授の指導監修のもとに行われた。断片の特徴から奈良時代、8世紀後半頃の様式を基本とし、同時期の諸仏を参考に制作を進めた。1/3雛形原型から原寸大粘土原型を制作し、型取りをして（石膏型及びシリコン型）、エポキシ樹脂で成形をした。出土した塑像断片の非接触型三次元測量をし、そのデータを元に製作されたレプリカを、成形された本体に嵌め込み（次項 図2）、丈六級三尊像（如来坐像は台座を含み3.8m、脇侍の菩薩立像は台座を含め3.4m）として復元した。（図1）



（図1）上淀麿寺白鳳の丘展示館内に設置された丈六級三尊像

4、出土塑像断片の三次元測量とレプリカ制作

発掘調査により出土した主要な塑像断片には、表面に彩色が残っているものもあるため、遺物に与えるダメージを最小限に抑える、非接触型の三次元デジタイザ（コニカミノルタ VIVID9i）による計測と造形機によるレプリカ制作を、株式会社地域みらいに於いて行った。（図3）三次元計測によって得られたデータを用い、各部材単位でデータの合成を行ったうえで、メッシュモデルの作成を行った。（図4）その後、作成した三次元モデルデータをレプリカ作成用の造形機に入力して造形作業を行い、樹脂製のレプリカ（28点）を製作した。（図5）それらを粘土原型に組み込むことで（図6）、復元像のサイズを推測するとともに、衣文や装身具の形もこれらを元に造形した。また、出土断片の情報を織り込むことで、復元の信頼性を高めることができた。



図3) 三次元測量作業



図4) 塑像断片（左）とメッシュサーフェスモデル画像（右）



図5) 造形機で製作されたレプリカ断片(3/28個中)



図2) 本体に嵌め込んだレプリカ断片



図6) 粘土原型に嵌め込んだレプリカ断片

5、おわりに

展示室全体をもって大仏を含めた金堂内の礼拝空間を復元した<上淀白鳳の丘展示館>は、当時の歴史や信仰心をしのぶ、新たな体験型展示空間として、今後も地域社会の活性化に貢献することを望む。多くの発掘品を展示する従来の展示空間と併せて、再現された宗教空間は、来館者の想像力を膨らまし、より身近に上淀周辺の歴史や文化への興味を高めると考える次第である。